

■研究・実践の課題（テーマ）

高齢者における基本チェックリストを用いた主観的な口腔機能低下と低栄養・フレイル予測因子の検討

■主任研究者 岡田希和子

■共同研究者 宇野千晴、前田篤史

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【研究実践の目的ならびに期待される成果】

高齢者に対する栄養指導では、フレイル予防の視点を持ち、栄養管理を行う必要があるが、フレイル予防の栄養指導においては、管理栄養士が重視すべき視点や指導内容は確立されていない。一方で口腔機能低下は、栄養補給に直接影響を及ぼし、近年ではオーラルフレイルの概念の考案、口腔機能低下症の医療保険病名採用による医療環境整備が急速に進んでいる。基本チェックリストには、口腔機能の項目があり、これらの項目は栄養指導にて確認することができる簡便な情報であり、1年後のフレイルリスクと関連性が検証することができれば、体重の変化以外にも、栄養指導のギアチェンジのタイミングを図るものとして、活用できるものとする。本研究は、食・栄養の視点からフレイルに陥るプロセスを明らかにし、介入方法を解明することを目的に実施する。本知見は、介護予防プログラム作成の一助となり、より効果的な介護予防、ひいては健康長寿の実現の一助につながる方策となる可能性がある。

【対象】

本研究は、国立長寿医療研究センター、ロコモ・フレイル外来を受診した75歳以上の（自力歩行可能で）通院できる高齢者を対象とする。なお、中等度以上の認知機能低下がある者（MMSE<18）、要介護認定を受けている者は除外する。

【取得データならびに解析方法】

本研究は、まず口腔機能低下と食事摂取との関連、および口腔機能とフレイルとの関連を横断的に検討する。また、簡易的な口腔機能評価と実測評価の関連性についても検証を行う。さらに、口腔機能の1年間の変化とフレイル状態および栄養状態の1年間の変化との関連について実測値を含めて縦断的に検証し、発生率ならびに発生要因を検証する。栄養状態の評価は、MNA[®]-SF、フレイルの評価はJ-CHS基準、基本チェックリスト、口腔機能の評価は、口腔衛生状態、口腔乾燥、咬合力、舌口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能（咀嚼能率スコア法）、嚥下機能（EAT-10）歯牙数、反復唾液嚥下テスト、改訂版水のみテストとする。その他、身体的評価として、In Bodyによる筋量評価、握力、歩行速度、精神心理面

は、GDS-15、社会性は、LSNS-6、認知機能（Mini-Mental State Examination）、感覚機能について聴取した。